

古書と出版の比較文化論

— 比較出版都市論のための試み イギリス編 —

大 内 田 鶴 子*

目 次

序論

神田神保町の現況
これまでの研究から得た仮説
現代の日英の本の町の状況

第一章 書物と意識

第1節 識字の社会史の必要性
第2節 書くことと意識
第3節 印刷物の普及と意識

第二章 ヨーロッパにおける本の文化の形成

第1節 本の出現
第2節 16世紀技術書と科学の基盤
第3節 16世紀フランドルの本屋（プランタンとカクストン）
クリストフ・プランタン（1520-1589）
ウィリアム・カクストン（1415頃-1491頃）

第三章 イギリスの出版活動の歴史

第1節 17世紀イギリスにおけるリテラシーの特質
(1) 声による報道
(2) 説教と意識の覚醒
(3) 信仰の基本としての読み書き
第2節 17世紀イギリスのジャーナリズム
(1) ステーションズ・カンパニー（出版同業組合）
(2) 17世紀の時事報道
(3) 「紙爆弾」による言論戦
(4) 17世紀のコーヒーハウス — 情報交換と世論形成の場 —
(5) 郵便とコーヒーハウス
第3節 18世紀のイギリスの出版界と読者
(1) 中産階級の読書
(2) 18世紀のウィット
(3) ブッククラブ
(4) 貸本屋
第4節 19世紀以降の労働者の読書

2007年11月30日受付

* 江戸川大学 ライフデザイン学科教授 都市社会学, コミュニティ論
キーワード：本, 出版, 都市

序 論

本という知識の器が集積している場所については、図書館を除いて、これまであまり研究者の関心が払われなかった。ヘイ・オン・ワイも神田神保町も観光案内には取り上げられてきたが、研究の対象にはされなかった。日本語と英語の文字で書かれた書物は印刷されている言語が異なるだけの同じ物に見える。日本語の辞書で「本」を調べると、「書物」と並んで「物事の根本」と説明されている。また、書籍、書物、図書、読本、絵本、脚本など「書」（書かれたもの、書く行為）と係わりながら、様々な本の種類が列記されている。英語の一般向け辞書では、「本」Book は「書籍」の他に「文字で書かれた紙の束」または「聖書」であり、ビジネスに使う「帳簿、ノート」である。「聖典」と帳簿類の中間の「書物」の意味が少ない。また、「物事の根本」としてよりも「ルール」の意味合いを持つようである。このように、本と出版活動は、その文化的背景を映し出す器でもある。

西暦 2000 年前後の 10 年間に於いて、私達の選択可能な情報量が 410 倍に増えている。インターネットの普及による量の拡大が大きく、情報大爆発といえる状況にある（秋山 12）。出版の歴史を紐解くと、実は過去に世界のあちらこちらで情報爆発が起きていたことが知られる。最もよく知られている例は、15 世紀から 16 世紀初頭のドイツ・フランス・イタリア・ネーデルランドで、グーテンベルグの印刷術発明の直後から宗教改革の期間を通じて起こっている。ついで有名な例は、17 世紀初頭のイギリスでピューリタン革命期の言論戦争と関連している。現在の状況を理解するために興味深い歴史事実であり、歴史から何かを学べる可能性を示唆している。

視野が拡散することを防ぐために、ここでは都市の構成員としての出版産業と本屋の研究に方向性を定めたい。小論は、本と出版活動から都市形成の要因を探るために、出版文化を比較し、通史的整理を試みるものである。歴史学・文学の諸兄

姉からは事実の記述が大胆で不注意であるというお叱りを受けることを予想している。この小論は比較都市社会学へ発展させるための、社会学的想像のエッセーに過ぎない。

神田神保町の現況

本研究の日本での対象地区（東京都千代田区神田神保町）は、東京商工会議所千代田支部（平成 18 年調査）によると、古書店 176 社、新刊書店 44 社、出版社 425 社、取次店 16 社、出版関係プロダクション 40 社、印刷会社 4 社、製本会社 19 社、合計 724 の書籍関連業者が集積している。売場面積でいうと約 5,000 坪、在庫 1,000 万冊の世界一の書店街であり（ギネスブックに申請中であるようだ）、周囲は、大新聞社、官庁街、大学街など情報発信地に近接している。近年の動向としては、古書店、新刊書店ともに増加し、取次は依然減少、出版社も減少し、これまでになかった分類として出版関係プロダクションが登場している。

なお、以前の神保町古書店街の検索サイトである「BOOK TOWN KANDA」は「BOOK TOWN じんぼう」に改版され、新刊書のデータや、国立情報学研究所のデータベースとの連携も検討され、操作の利便性も向上している。平成 19 年には、小学館が「神保町シアタービル」を開館し、映画・演劇・音楽などの情報発信も岩波ホールやカザルスホールに加えて強化される。千代田区立図書館は、国立情報学研究所とブックタウンじんぼうと検索システムを統合し、平成 19 年の新装開館から公立図書館においても、新刊書や古書の購入案内を行うサービスを始めた。電子図書のインターネットでの閲覧サービスも開始された。このように、知識・情報の提供サービスの総合化を推進しながら専門書店街、出版関連産業地区としての特性を強化しつつある。

これまでの研究から得た仮説

古書店が、靖国通り南側に軒を並べている様は壮観である。高層ビルの立ち並ぶ千代田区において、さぞかしや確乎とした都市計画の思想のもとにゾーニングしたのだらうと思わせるが、実は、

都市計画とまったく関係がない。商店街近代化計画書すら一冊も持っていなかった。近代的な都市計画によらずして、なぜこのように街の景観にコントロールが効いているのか。街並みの形成要因として江戸以来の町組的慣習が考えられる。神保町の古本屋は組合を結成し市を開いている。この市会の歴史は100年に近づこうとしている。組合と市場というギルドの形態は、もはやイギリスにもアメリカにも見られない。この組合と（市場）市会は大正初年に現在の組合の創始者達が発明したものであると思われてきたが、類似した活動が江戸時代から存在したことが知られるのである。古書籍商業協同組合は江戸時代から続く日本の本の文化の継承者である可能性が高い。

これらの慣習や価値がなぜ存続しているのか、その答えは経済学や都市計画学からは得られないであろう。そして、現代だけを鋭く分析する社会学によっても十分に説明できない。このため本と出版の歴史を紐解く必要に迫られた。今日、グローバルな影響力を持つ英語文化の国における本と出版の歴史と、日本の本と出版の歴史を対比させることで、説明の要因を発見したいと考えた。すなわち、日英比較出版文化史に深入りすることになった。

本稿に先立ち、平成16年から平成18年まで受けた科学研究費による研究で得られた知見について簡単に触れたい。この小論は、同成果報告書の成果を前提とし、その発展として構想されたものだからである。

現代の日英の本の町の状況

現代イギリスにはBook-town「本の町」といわれる町がいくつかできている。リアルな世界の古書の中心市場たるロンドンでは、チャリング・クロスロード周辺が神保町に対応するものと考えられる。しかし、本屋の数は少ない。また、本屋の新古の区別はない。古いデータではあるが、神保町の古書店主達が反町茂男に率いられて調べた記録（文庫の会49）を参考にしよう。1971年当時のロンドンの主たる稀覯本屋は、Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Luzac and

Company Ltd., Bondy, Louis W., Foyle, W. & G. Ltd., Marks & Co., Joseph, E., John Faustus, Francis Edward（以下省略）など約20社であった。現在はかなり廃業しており、経営者も変わっている。2006年現在、Francis Edward（フランシス・エドワード）はヘイ・シネマブックス（店名）とともに本社をヘイ・オン・ワイに置いている。新たに参入してきたグレッグ・クームズは、「本の王」リチャード・ブース（ブース1999）のかつての事業の一部を買い取った他に、老舗の古典籍商も買収したのである。

本の町、ヘイ・オン・ワイはリチャード・ブースが開業した1962年に始まる。ブースがヘイ城を買い取るのが1971年である。反町一行はヘイを見ていない。HEY-ON-WYEの古書店街は、ウェールズの無名・遠隔の田舎町に、リチャード・ブースという「本の王」を自称する人物が大量の古本を持ち込んで、「本の町」へと発展させたものである。この町は、行政に依存しない、新しい観光の手法を実践している（藤田・ブース・コリンズ）。1980年代半ばには、ヘイ・オン・ワイにつづいて、イギリスのその他の地域や、ヨーロッパ各地、アメリカやアジアにおいても、「本の町」に共鳴した人々が、本を一つの観光的な魅力とした「町おこし」運動をはじめた。これらは、サスティナブルな農村ツーリズムのモデルであり、過疎地となった田舎が、さまざまな形で自己覚醒したことの現れであった。また、こうした、古本の町が成立する背景には、多量の本が社会に蓄積されていることと、日常に本を読む人の増加があることに注目できる（藤田2007）。

ヘイ・オン・ワイは英語の本を扱うことから、国際的に有名になっている。これに対して日本の神田神保町は日本国内を相手とした、日本語の本に限られている。国際的な検索から見ると、日本の「本の町」はイギリスの「本の町」ヘイ・オン・ワイの影に隠れてしまう（小山2007）。インターネットは巨大なグローバル化の力を、英語とともに拡大している。したがって、ヘイ・オン・ワイの古書店はインターネットを利用して発展している。そのことが検索時のヒットの数によ

て証明された。それにもかかわらずヘイ・オン・ワイの本屋のなかには、インターネットに反発する動きも見られる。小山騰は「本の町」の本屋は自分達のユニークさを強調すべきであると示唆している。

現在、東京神田神保町には、古書店 176 社、新刊書店 44 社、出版社 425 社その他関連会社を含めて、724 の書籍関連業者が集積している。この地に本屋が進出し始めたのは、明治 10 年頃、1886 年頃である。それは日本が近代化政策を実行した時期であり、この時を転換点として、当時の日本の出版センターは日本橋から神田に移行した。ロンドンとはまったく逆に、神田神保町は世紀を 2 回越えて発展を続けている。本と本屋を移植して観光開発しているローカルなヘイ・オン・ワイと異なり、神保町は日本語の本の巨大な出版センターであり、ナショナルな出版産業基地であることが大きな差異である。その神保町の町を特徴付けているのが、圧倒的に多い古本屋である。その古本屋は江戸時代的な本屋仲間との関連がみられる。他方、組合と市場という本屋のギルドの形態は、もはやイギリスにもアメリカにも見られない（大内 2007）。

古本屋の一番市場が神保町に存在する背景には、全国的な古本屋のネットワークの存在がある（熊田 2007）。古本屋の業態は様々で、ブック・オフのようなチェーン店から、伝統的な老舗、インターネットによる無店舗販売、電車内で集めた雑誌・文庫をターミナル駅付近で売る「あさりちゃん」まで色々ある。そのようなわけで、古本業界の実態は正確には把握されていない。このような不正確さは業界底辺での参入の自由さとも関連すると思われる。電話帳で調べると、日本全国には約 5,800 軒の古本屋がある。東京神田神保町に連合事務所のある全国古書籍商業協同組合への加入件数は約 2,500 件である。電話帳記載の古本屋は、都道府県ごとに、人口 2~3 万人あたり 1 店舗の割合で全国に普遍的に存在している。一般にイメージされる文化集積地に古書店が立地するという考え方ではこの数字を説明できない。

イギリスの歴史と比較しながら日本の出版業界

や読者の歴史を調べることににより、神保町の独特の雰囲気の原因、あるいは現代日本の出版事情の意味が明らかになるだろう。頭脳の活動としての出版活動を支えるのが肉体としての都市である。都市に現れる様々な文化の様式を、頭脳活動としての出版と本屋の動向から読み解くという方法を小論で試みる。なお、イギリスの歴史はヨーロッパ全体と密接に繋がっているので、古書と出版の歴史も必要に応じてオランダ、フランス、ドイツなどに言及することになるであろう。

第一章 書物と意識

第 1 節 識字の社会史の必要性

東西の出版文化を比較するに当たって、比較を可能にするために両者に共通する文化の基盤、あるいは認識論的前提について述べたい。その前提とは、「字を読む」「本を読む」ことは人の意識を高め発展させる、という考え方である。そして、字の読み方、本の読み方の違いが、文化の差異を生み出す要因の一つであり、創り出される社会的、物質的世界の違いと関連しているとする仮説である。

知識が一般大衆に普及する過程、知識社会が進展する過程を出版活動の比較社会史として見てみようとする時、W-J. オングの研究が認識論的基盤を与えてくれる（オング 1991）。「識字史」は私の造語であるが、識字の能力（リテラシー）の獲得を社会史として展開する必要性を感じている。手紙を書き、本を読む、あるいは日記を書く能力が自我の形成に大きく影響することが経験的に知られるからである。文学の作品はある時代の人間精神の存在を証明する手段であり、その他の分野の芸術家も現代に近づくほど言葉で自分の創作について語っている。自然科学の発展にとっても書き言葉の問題は見過ごすことができなかった（山本 2007）。ベネディクト・アンダーソンは、俗語による出版資本主義とナショナリズム（国民意識）の出現の関係について明らかにしている（アンダーソン 1997, 76）。このように、文字に書かれた言葉は人間の「自分を見つめる能力」「考える能力」

を高めてきた。

第2節 書くことと意識

W-J. オングは「書くこと」、そしてさらに「書かれたものとしての印刷物」「印刷物の大量化」が、自我の形成や人が認識することへの影響について、興味深い研究を行った。オングによると、ことばは無意識から生じており、話されることばと話すときの規則は、身体と直接に繋がっている。ところが、ことばが文字に定着されると、身体の外にある「もの」のようになり、そのことによって意識がより明確になるというものである。書くことは、「他人とはちがう」自分自身という感覚を強めることにより、人々の中の、いっそう意識的な相互作用をはぐくむ（オング 363）。印刷、特に大量の印刷物は意識と外界の分離をさらに促進するように働くのである。オングの説明は印刷の長い歴史を持つ日本文化の考察に興味深い視野を与えてくれる

レトリックは西欧における知的活動の基礎として伝統的な技法であった。レトリックとは、もともと公衆の前で話す技術、口頭弁論の技術であり、説得や開陳のためのものであった（オング）。レトリックにおける思考と表現は基本的に闘技的なもの、対比的なものとして行う。古代ギリシャ以来の西洋の学問的教養のなかではレトリックが優越し、ことばによるすべての表現は演説（術）として文字の世界（つまり学者、文人の世界）のなかにもつくりだされ、19世紀に至るまで、西洋の文体の大部分は何らかのしかたで学問的レトリックによって形成された^①。このことは、西洋の文化にある傾向をもたらした。その傾向とは、精神においても、精神の外の世界においても対立を極限までおしすすめるという傾向である（オング 230）。

今日では、意識が進化するものとしてとらえられるようになってきている。声としての言葉から抜け出て成長してきた「分析的で説明的な思考」は、声の文化の残り滓を、今なお振り落としてコンピュータ時代に邁進している。言葉はますます状況依存的でなくなってきた。論理が閉じたシステムであ

るという錯覚は書くことによって生じた。声の文化はそれと別の錯覚にとらわれているかもしれないが、言語を「構造」と見るような感覚はなかった（オング 344）。コミュニケーションの「メディア」モデルがすすんで受入れられるということは、書くことによって条件づけられた考え方がそこにあることを示している（オング 360）。

第3節 印刷物の普及と意識

オングによれば、西洋では15世紀半ばに可動活字（活版）が発達してから、印刷が情報を運ぶ目的で用いられるようになった。印刷は複雑なリストやチャートでも完全な正確で大量に再生産できるので、辞書や図版を生産することが可能となる。英語の辞書が出来たのは18世紀であり、百科事典である『百科全書』の刊行がフランスで始まったのも18世紀半ば、1751年であった。オングに従い西洋における意識と印刷物の関係をかいつまんで言えば、次のようになる。印刷物が増えれば増えるほど、意識の外にあるものが増大し、それだけ意識は強く分離されていった。光は理性の比喩であるが、理性（分離、分析、理論化する思考）が鋭くなり文字に書かれた知識が増えると、意識は理性の光を受けた逆光の影のように見ることができたのである。しかし、理性は意識を脳に、脳を神経に、神経を化学反応にと細分化させていくばかりで、トータルな私の像は理性＝光の逆光に透けて見える影以上にはならない。また、オングから示唆を受けて考えられることは、建物や都市がますます図面や構造計算、デザインになっていったことである。それは、人々の生きた生活が結晶したものとしてよりは、神に変わって人間が構築する物質世界になっていった。

このような、言葉・書くこと・自我・社会の関係は、オングが生きている英語やラテン語の世界に源を発するものである。日本は、書くことと印刷は古くから西洋とは異なる方法で文化の土壌になっていた。例えば、和歌や俳句は身体から発する声と直接結びついた言葉を書く表現方法であると思われる。最近では日本人も、他者から引き離された自己や、孤立と内面の危機を感じるものが

多くなっていると思われるが、もともとは集団帰属的な社会的性格と集団的自我を好むことで知られてきた。したがって本の読み方や、自意識の確立も英語の世界とは異なって形成されてきたのではないだろうか。

第二章 ヨーロッパにおける本の文化の形成

第1節 本の出現

リュシアン・フェーブルはフランスのアナール派の歴史学者であり、考証や実証に偏重する風潮に反発して、隣接の社会諸科学の最新の成果を援用しながら、過去の人間をトータルに捉えようとした（フェーブル 275）。『本の出現』は15世紀から18世紀末までの「構造的には依然として貴族中心であったヨーロッパ社会において、思想の伝達・普及の新しい様式が文化に及ぼした影響」（フェーブル・関根解説）を問題にしたものである。

15世紀に発明された金属活字による印刷技術は、またたく間にヨーロッパ全土に広がり、出版都市といえるセンターを作り出した。グーテンベルグ、フスト、シェーファーなどのドイツ人技術者による印刷工房がドイツのマインツに開設された時代は、宗教改革の始まりの時期でもあった。ルターの著作が次々と印刷されて広まるに連れて、カトリックの陣営も競ってラテン語の聖書など宗教書を出版普及した。

15世紀に印刷工房が開設されたのは、大学都市、大司教座のある都市、商業都市である。ドイツのマインツでの発明はまたたく間に、イタリア、フランス、ネーデルランドに広がる。マインツでの工房開設、1465年から15年後の1480年には、西ヨーロッパの110以上の都市で印刷工房が稼動していた（フェーブル 25）。この頃の出版産業の主な都市は、1位ベネチア、2位ミラノ、3位アウグスブルグ、4位ニュルンベルグで、パリは7位であった。マインツはもはやリストに載ってこない。15世紀末には、ネーデルランドのアントウェルペンが日の出の勢いで台頭してきて、ベネチアと肩を並べた。

16世紀の主な都市は、ドイツではケルン、フランスでは、パリ・リヨン、シュトラスブール、スイスのバーゼル、ネーデルランドではアントウェルペン、イギリスでは、ようやく国内産業としての印刷業がロンドンに確立するが、同時に出版統制下に組み込まれる。

1516年にルターの最初の著作がヴィッテンベルグの印刷工グリュネンベルグによって印刷され、1517年には贖罪状に関する提題が出版される。印刷工ロターは、ルターのドイツ語訳新約聖書を刷りまくった。その後各地の無数の印刷工房がルターの著作を何十万部と流布し、それがまた、宗教改革に加担した都市で偽造され広がっていった。1520年から1540年の間はドイツの出版産業は南部から北部に移動していた（フェーブル 38）。

16世紀後半、1570年にはカトリック・ルネッサンスによる巻き返しが出版センターを変化させる。再び、ケルン、パリ、リヨンなどカトリック派の都市が盛り返した。アントワープのプランタン=モレトゥス家の隆盛はその典型である。16世紀後半においては、カトリック系印刷工房ネットワーク対プロテスタント系印刷工房ネットワークという商売競争の構図が成立していた。とはいえ、印刷屋は商売のためなら刊行地を偽って、敵方の宗教書も刷っていたので、現実はまだカオスであったろう。

17世紀中葉に入ると、宗教書はひととおり行き渡ってしまい、売れなくなる。出版業界は不況になる。17世紀後半に出てきた新しい需要は、ラテン語を知らない層の読者であり、母国語の世俗文学が流行する。

例えば、フランスでは、200年間増加し続けた印刷工房が、1655年頃大不況に陥る。印刷屋は規模を縮小して、日常的な印刷需要で生き延びようとするが、仕事のためには、あえて違法文書（誹謗文書や悪書）も出版した。それは政府による出版統制の強化を招くところとなった（フェーブル 44）。フランスの17世紀は出版統制の時代であり、大革命によって解除となる。

地球の裏側であり、政治的にも宗教的にも無関係な日本においても、この頃出版統制が始まるの

は興味深い事実である。

第2節 16世紀技術書と科学の基盤

16世紀に世俗文学が出現するのと同様並行して、職人による技術書が俗語で記され印刷されて流布された。ヨーロッパの知的伝統においては、ギリシャやローマの写本を読み、プラトンのイデア論、対話編などについて討議を行うといった、貴族的なルネッサンスや人文主義が次の時代の準備を行ったと考えられてきた。自然科学の立場においては、スコラ哲学から近代科学への流れは、連続なのか断絶なのか、詳しい事情の研究がまだ整っていなかった。近年の歴史学を主とする様々な研究分野の成果を取り入れて、山本義隆は、16世紀に近代科学の発展の基盤となると思われる文化変容を指摘した。

16世紀後半のイギリスでは、科学は学者の仕事ではなく、もっぱら商人と職人の携わる分野であり、オックスフォードやケンブリッジではなくロンドンの市中において、ラテン語ではなく俗語（英語）で創造された。カフェで化学実験が披露された話は有名である。

山本は、16世紀には、中世以来のスコラ哲学、ルネッサンス芸術、人文主義の潮流以外にも一つの潮流が生じたと述べている。大学の外において、それまでの学問分野では科学と認めがたい、経験に基づき俗語で書かれた技術研究書が印刷され出回ったのであった。

1522年にアダム・リーゼの『線とペンによる計算』、1522年にアルブレヒト・デューラーの幾何学書『測定術教則』が出版された（山本16）。ロンドンの職人ロバート・ノーマンは『新しい引力』を1581年に著した。リーゼは坑夫として働きながら数学を学び、デューラーは徒弟修業で教育された画家であった。いずれの書物も当時は学問として認められなかったドイツ語や英語で書かれている。これらの技術者の磁力や引力の経験に基づく研究の後で地動説や重力の学説が「発見」されたのであった。

当時、手仕事や機械的な作業は知識階級の係わる仕事ではなかった。元来「奴隷」の仕事であり、

侮蔑の対象であった。したがって、ラテン語を知らない職人や技術者、芸術家が俗語で学問的な書物を書くということ、それらが印刷書籍として大量に流通するということは、それ自体で革命的な変化であったといえるのである（山本16）。これらの底流が、学問の世界に文書偏重の学から経験重視の知への転換を迫り、実験と測定に依拠した定量的科学を誕生させた。

16世紀における職人的経験知は、同時代の国語形成と印刷技術の浸透によって、ギルドの内部に蓄積されそれぞれ関連なく並存していた。16世紀のもう一つの知覚革命が、図像表現の技術開発であった。分解組立図法、断面図法、透視図法が発見され、木版画や銅版画として本の中に挿図された。

学問の新しい担い手の登場は、新しい対象と、新しい方法、新しい伝達媒体と表現手段を伴っており、「16世紀文化革命」と称するに値する根底的な地殻変動であった（山本26）。

第3節 16世紀フランドルの本屋 （プランタンとカクストン）

クリストフ・プランタン（1520-1589）

本屋の話に戻そう。香内三郎は『活字文化の誕生』でヨーロッパの16世紀から18世紀までの言論状況の研究を行っている。とりわけ活字文化（本）の実態と読み書き能力がどうであったかに詳しい。歴史上、グーテンベルグのマインツに次いで、早い時期に出現した出版都市の一つとして知られているネーデルランドのアントワープで、クリストフ・プランタンという印刷業の大実業家が存在したことが知られている。アントワープのその工房兼住宅は現在活版印刷の博物館になっており、印刷に関する研究者の聖地となっている。なお、ヨーロッパで印刷博物館を持つ都市は、マインツ、アントワープ、リヨンである（宮下2）。プランタンは、マルティン・ルターの新約聖書翻訳と同時代に、カトリックの立場（実際には宗派不明の立場）において聖書や地図（メルカトル）の印刷を行って活躍した。

16世紀においては、神聖ローマ帝国領アント

ワープが、世界最大の商品市場の一つであり、聖ルカ組合という印刷業者のギルドを持っていた。1500年～1540年のアントワープの印刷者は66人で、刊行点数は2,250冊、半数がラテン語、その他はオランダ語、フランス語、ドイツ語、英語、スペイン語、イタリア語、ギリシャ語の本を出版していた（香内66）。なお、この頃イギリスでは印刷技術が未熟で、国語である英語の本もネーデルランドのプランタンから購入していた。16世紀のアントワープでは、ほとんど誰もが読み書きでき、150の学校があり、学校教師のギルドがあった。

この時代のアントワープ周辺は、ルター派、カルヴァン派のほか、再洗礼派、ヨリス・カサンダー、ダヴィット・ヨリス、神秘主義、愛の家族（ヘンドリック・ニクラエス）などのセクトによる「異端・邪教」の横行する地帯であり、1523年にはブリュッセルにおいて世界最初のプロテスタント殉教者を出している。

アントワープを含め、この地方の各都市は青年達の伝統的な集会所「修辞室」（討論クラブ、演劇クラブ、娯楽室）を持っていた。カルヴァン派はそこに浸透して布教の拠点にしたという（香内71）。プランタンは後世に、セクト「愛の家族」のメンバーであったことが判明するが、当時においてはカトリックを名乗り神聖ローマ皇帝の信頼を得て聖書の印刷だけでなく、出版統制の指導者にまで任じられている。

1550年、神聖ローマ皇帝フェリペ二世が「異端」根絶の勅令を出して、異端の集会・説教・聖書についての議論を禁じ、活字媒体については、すべて書くことも、売ることも禁じられていた。プランタンは一方でアントワープの工房でヘンドリック・ニクラエスの著作を印刷し、他方で皇帝に「外国語対照聖書」の印刷を願い出ている。1562年に、王室によって彼の疑わしい立場が察知され捜査が入るが、その前に、工房を倒産させパリへ亡命する。やがて舞い戻ってきて「ポリグロット・バイブル」の刊行事業を申し出たのであった。当時公認のラテン語聖書の誤訳や欠陥などが、「テキスト・クリティーク」によって多

く発見されていた。その成果を取り入れた、ギリシャ語、ヘブライ語、アラム語、ラテン語のテキストを並べ注釈を付けた「ポリグロット・バイブル」を刊行しようとしたのである。1568年に、司祭モンターの監督の下に刊行をプランタンに任せる皇帝の認可が下りた。司祭モンターは、プランタンをルーベン大学に同行し、神学部の前面協力を取り付けた。この時期、本屋の統制は、ルーベン大学作成の禁書目録（1550年295冊、51年に69冊追加）と、在庫カタログを店頭に出すことを義務付けることで行われていた。

プランタンの印刷所は印刷機21台、職人80人の大工房で、30年間の活動期間に2,000種類の本、部数においても2,000部を超えるものを含むなど、当時の出版センターのもう一つであるベネチアの最高記録を超えていた。アントワープは16世紀最大の出版センターであったと言える。プランタンの印刷所は「愛の家族」の実践場であつたらしく、職人も召使も子供も、純正のラテン語で日常話し合う理想の人工生活共同体であったという（香内92）。

ウィリアム・カクストン（1415頃-1491頃）

プランタン以前の大印刷業者として、イギリス人のカクストンが知られているが、カクストンが印刷工場を持っていたのもフランドルのブリュージュであった。

1476年から1536年の間にイギリスにいた印刷業者・書籍業者・製本師の3分の2は外国人であった。先に見たように、ドイツ人印刷工を中心として遍歴職人としてヨーロッパを巡回していたのである。また、紙の生産はイタリアとフランスが中心地であり、出版事業の資本家は初期に、イタリア人、ついでフランス人、プランタンのようにオランダ・ベルギー人、ドイツ人によって構成されていた。カクストンは印刷業であるよりも大毛織物商業者であった。ロンドン有数の大特権組合である織物商組合の指導者層の一人であるロバート・ラージ（後にロンドン市長）の徒弟として組合員になっている（1453年）。毛織物輸出商組合への特許状（1462年）では、カクストンはフランド

ル地方で活動するイギリス人商人統括のための「総督」に任命されている。カクストンはイギリスの毛織物工業輸出の前進基地ブリュージュに印刷工場を開いていたのである（香内 40）。カクストンがイギリスに戻ったのは 1467 年で、ウェストミンスターに印刷工房を開いた。カクストンもプランタンとともに主な印刷物は宗教書や典礼書で王室のパトロンのもとに事業を行った。

カクストンの特徴は毛織物大商人であったことである。イギリスの印刷業は大商業資本の支えがあって始めて成立した。紙の生産も外国に頼っていたため、出版関係業界のギルドが成立して後でも、紙の輸入業者が出版業界を支配したのであった。

16 世紀イギリスの出版業の誕生

さて、イギリス・テューダー王朝は、1484 年に出身地を問わず、書籍商と印刷工について、外国人労働に対して加えられた制限を撤廃した。外国から独立した印刷業を確立すべく保護政策を実施したのであった。カクストンの後継者ウィンキン・デ・ウォルデはアルザス出身者であった（フェーブル 35）。ついで 1523 年になると、英国人でない徒弟を外国人が雇うことを禁止し、1534 年には外国人印刷工のイギリスへの移民開放策である 1484 年の法令を廃止した。さらに、1543 年に国王は 2 名のイギリス人に礼拝用書物の独占出版権を与え、1557 年にメアリー・テューダーは、書籍商組合に勅許状を授け、1586 年には殆どの印刷業者をロンドンに集め（例外はオックスフォードとケンブリッジであった）、ギルドの構成員人数を 22 人に制限してしまった。

この出版業の独占化はイギリスの宗教改革と密接に結びついていた。イギリスにおける宗教改革は、歴代の英国王に、英国と大陸間の書物の取引を阻害する政策を取らせた。イギリス国教会を確立する過程で、大陸の過激なプロテスタントと政治思想の影響力を抑止したものと思われる。この点で、日本の徳川幕府が江戸開府後少し経てからキリシタン（プロテスタントではなかったが）を禁制にしたことが思い出される。

第三章 イギリスの出版活動の歴史

第 1 節 17 世紀イギリスにおける リテラシーの特質

(1) 声による報道

17 世紀のイギリスはジャーナリズム（時事的言論活動）を創造した。では 17 世紀において、どのような情報伝達の間からジャーナリズムが創造されたのか。ひとつは、コーヒーハウスという場を中心に発行された、紙媒体であるニューズ・レターとマガジンである。香内三郎は、ピューリタン革命に在るまでの情報媒体としてもう一つ重要な役割を果たしたものとして、「説教」に注目している。より大衆的レベルでの知的関心と時局報道への関心は聴くことによって充たされた。読み書き能力の前段階での変化と係わる「説教」について香内氏の研究からその状況をうかがおう。

イギリスの 17 世紀という時代は言論活動が異常な隆盛を見せた。1641 年に議会報道を主とした週間新聞が発刊され出版活動はほぼ自由になった。が、1642 年、議事に関し「虚偽または中傷的報道をする出版物」の統制令が出る。さらに 1647 年に議会は出版統制新令を出す、効果なく、非合法紙全盛の時代となる。1651 年にはホブズの『リヴァイアサン』が刊行されている。ホブズはこのような当時の社会状況、万人の万人に対する闘争状態を前提として、強い政府の必要性を説いた。これらの出版活動と対をなすような言論活動が、講師による「説教」であった。

17 世紀における説教の民衆浸透力は絶大であり、ロンドンで毎週行われた説教では、芝居など及びもつかない桁違いの多くの聴衆を集めた（香内 101）。このため、王室が、政治的意思を社会の底辺にまで伝達させる手段として利用し、主要な大教区の牧師に「説教の内容」を指示した。次第に説教壇は国内外ニュースの仲介所にもなり、牧師聖職者もそれを心得て、政治ニュース・政治宣伝を当然の職務と受入れるようになった。他方で「聖書講読会」が禁止され、「講師」の制度化がはかられる。「講師」は、コーポレーション、

自治体、特権の大ギルドや、個人のグループなどが講師料を払って「説教」を聴く慣習が生じたものを、国教会が、内部の異系システムとして取り込み、公認した結果定着したものである（香内 104）。説教師はいわばフリーランスの聖職者で、昔からの聖職者牧師（聖職禄を受けている人々）の系列とは別の「知識人」で、雇われて定期的に説教した。彼らの「説教」＝講義の内容は、慣習化した正規の日用礼拝の説教よりも、ピューリタンの意味で密度が濃く、人々に好んで受入れられた。やがて、「コーポレーション+レクチャー」が国王の害になるといった意見が度々表明されるようになった（香内 100）。

17 世紀半ばに入ると「講師」に対する統制が強まり、制度としては限界に達するのと並行して「説教の自由」が拡大し、ピューリタン革命へと進んでいく。この後は、コーヒーハウスが議論の場、日刊新聞や雑誌の閲覧室となり情報伝達の新しい場所（媒体）となる。

日本においても、明治時代の初期に「説教」が取り入れられた。講談という話芸の娯楽が江戸時代に確立していた。明治初年に世相や歴史について講釈する伯円という大講談師が現れた。明治政府は彼に民衆を教化する教導師として高い地位「大講義」を与える（1885 年）。これは、当時の市川団十郎より高い地位であった。伯円を含む講談師達は開花講談師としてやがて民権演説も行うようになる。これが憲兵に監視されるようになり、識字率の急激な上昇とともに、講談の娯楽は新聞の連載読み物に取って代わられるようになる。こうして、講談は寄席から姿を消していった（倉田 43）。

(2) 説教と意識の覚醒

ところで「説教」が人々の内面に及ぼした影響にも注目したい。香内氏は「説教」が隆盛になった背景として、大衆の「聴く」意欲・熱意が盛り上がったこと、知識欲の増した「聴き手」に姿勢の変化が起こったことに注目している。説教壇の上から、神の恩寵として魂を掴まれ、ゆさぶられるだけの受動的な存在から、ノートを取る習慣をつ

けた「理性的な聴き手」へと変化したことに注目している（香内 108）。また、これと並行して、聴衆が牧師の説教に質問し、反対し、討論する慣習も、諸セクト内部でひそやかに広がっていた（香内 110）。この時期、聖書を媒介にして神と直接つながるというピューリタニズムの原理を持った多くのセクトは専門職業的な聖職者を認めず、信者集団のなかで才能ある俗人が「説教」すればそれでよいとした（香内 120）。誰もが神の恩寵により、靈感・内面の光を受けることができると信じられるようになると、無数の預言者を生み出した。1640-1650 年代には『天路歷程』のジョン・バニヤンなど「職人説教師」を輩出したが、1645 年に俗人説教は新しい権力である議会に禁止された（香内 120）。

(3) 信仰の基本としての読み書き

プロテスタント派宗教改革は人々の識字能力を高める原動力であった。神による救済は、一人ひとりが宗教を理解することによってのみ達成されるので、一人ひとりの理解のためには、聖書を読むことが要求されたのである。識字力こそ信仰の基本とされた。

熱心なプロテスタント教会は教育問題に真剣に取り組んだ。スコットランドでは、長老教会が教育制度を発達させたので、イングランドよりも早く識字率が高まった。イギリス国教会では、1604 年以降、牧師が教区の子供を教育しなければならなかった。これはなかなか実現できなかったが、かわって篤志家によって慈善学校がつくられていった（フェザー 278）。

第 2 節 17 世紀イギリスのジャーナリズム

(1) ステーションズ・カンパニー

（出版同業組合）

16 世紀以降、イギリスの印刷・出版産業は中世都市と王の勅許が結びついた独占産業であった。印刷物の中心は、聖書と占星術の暦であった。

イギリスの出版人組合は印刷が発明される以前から存在していた。それは代書人の組合まで遡ることができる。1357 年に法令書類の代書人と写

本の装飾家がロンドンで一つのギルドを作っていた。1403年に再組織化し、書籍販売人と製本家が加わった。1557年にロンドンのステーション・カンパニー（正式名称は「ロンドンの印刷・出版業者の権威ある組合」）（フェザー、59）は、次のような勅許を得た。①ロンドン市以外での印刷の禁止。組合員はロンドン市民でなければならなかった。②出版の事前許可手続きにギルドが係わる。

このようにして、17世紀末まで、印刷はロンドンに限定された。印刷所を所有する権利は少人数の親方グループに制限され、出版経済を独占した。印刷が王室や貴族や大商人のパトロンから独立して自己採算でできるようになるのは16世紀になってからである。16世紀半ばに国内印刷業が確立すると、大量の紙の輸入が必要になった。紙の大規模な輸入は大書籍販売業者にのみ可能であった。つまり、紙と本の輸入業者がギルドの支配勢力となった。

書籍の種類は少なく、特許書籍として独占されていた。これらの印刷はギルド内の格の低い職人に請け負わせて、理事達はその利益を共同特許権者のあいだで分配した。つまり、特許権を運用して配当を得ていたのである。1603年にはこの特許権が「イングリッシュ・ストック」として法人化された（フェザー、73）。この法人は105人の株主からなり、運用について委員会で決定していた。このような考え方が、後に著作権へと進展したのであった。

ところで、17世紀の内戦期には印刷物需要が「爆発」と言ってよいほど拡大し、ギルドによる統制の手に負えなくなる。同時に、多くの同業組合がその特権を攻撃され、印刷業界も例外ではなかった。1642年の言論戦が始まると、印刷業界も無政府状態になった。

(2) 17世紀の時事報道

新聞こそは、活字が日常生活に浸透する最大の手段である。1621年、本屋のトマス・アーチャーが出した『クーラント』が最初の新聞といわれている。両面印刷の一枚紙で、発行部数は500部で

あった（小林125）。それまでの紙媒体の報道は、大事件や戦争についての歌（バラッド）を印刷した「ブロードサイド（シート）」が市中で売られた。また、不定期刊行物として冊子型の新聞「ニューズブック」というものがあつた。神聖ローマ帝国の外交・軍事について、ドイツ、オランダ、フランスなどで、16世紀から17世紀初めにかけて続々と発行された。

1640年から1660年の間（ピューリタン革命）には、ロンドンで12種類の新聞が発行され、記事内容は王党派と議会派の論戦が主であった。王政復古後、ヘンリー・マディマンの『パーリャメントリー・インテリジェンサー（議会通信）』はすぐに紙名を『キングダムズ・インテリジェンサー（王国通信）』に変え、同じマディマンの『メルクリウス・プブリクス』との2紙だけが発行を許可され、ニュースの独占権を得た。これは3年間で終わり、その後は『ロンドン・ガゼット』のみが国王公認の新聞となった。「出版規制条例」によって不敬や反逆の罪にあたる印刷物について取り締まったが、効果があがらず、言論の自由は止められなかった。1695年頃には再び出版の自由の状態に戻っている。1681年にこれまで以上に国内ニュースが多い『ドメスティック・インテリジェンス』が、ベンジャミン・ハリスによって発行される。ハリスは1690年にアメリカ、ボストンでもアメリカ最初の新聞を発行している（小林132）。

1700年代、18世紀に入ると、デフォーが雑誌『レビュー』を創刊し、スウィフトが『エグザミネー』の主筆をつめるようになる。

(3) 「紙爆弾」による言論戦

内戦期を通じて、印刷商売の中心になったのは、政治的宣伝文書であった。ロンドンでは、印刷所の数が増え続け、印刷物が激増した。議会派の支持者であった、ジョージ・トマソンは、1640年代、1650年代にニュース本、パンフレットを23,000点集めた（フェザー87）。このような出版の状況は、量的にも内容的にも前代未聞であった。1641年以降、ニュース本は積極的に国内政治に口を出すようになった。1643年の頃には、本物

の戦争と平行して、新聞による言論戦が行われるようになった（小林 88）。

宣伝パンフは、非常に積極的、行動的な文字・印刷物の使い方である。政治宣伝ビラは今日ではあまり使われないが、第二次世界大戦中まで飛行機によって上空からバラ撒かれるなど、武器の一種のように使用された。このような印刷物の使用法は日本の伝統からは生まれなかった。イギリス、そして英語世界ではこれ以後、宣伝の手段として印刷そして文字を無視しえなくなる。ニュース本やパンフレットは氾濫し、街頭で売られるようになり、識字力を重視するピューリタン派の思想とシナジー効果を発揮した。

(4) 17 世紀のコーヒーハウス

—— 情報交換と世論形成の場 ——

1650 年にオックスフォードに初めて出現したコーヒーハウスは、2 年後にはロンドンに開店し、18 世紀の初期には 2,000 軒に達した（清水 12）。コーヒーハウスには常時何種類かの新聞や雑誌が置かれ、2~3 軒も回れば、多くの異なった情報を入手できた。そこには、あらゆる種類の情報があり、様々な人がいて、コーヒーも飲むことができる。これらすべてが 1 ペニーで済んだ。この安くて便利な情報センターが大流行の原因であった。「新聞屋」や「雑誌記者」は、コーヒーハウスをまわって記事を取材した。いや逆である。コーヒーハウスで話される海外情報やゴシップを拾い集めて紙に書き、印刷したものがニューズ・レターやマガジンの始まりであった。

初期のコーヒーハウスは、職業、身分、階層の区別のない人間のるつぽであったが、しだいに特定グループや職業の人たちが集まる閉鎖的な場所になっていった。例えば弁護士・学者はグresham（茶房）、ホイッグ党員はセントジェイムズ（茶房）、トーリー党員はココア・ツリー（茶房）、株式仲買人はジョナサン（茶房）といった具合である。このようにして、ウィルなど文人の集まるコーヒーハウスでは文壇が形成されていった。

ウィルは 17 世紀末いつでも客で満員だった。タバコの煙が立ち込め、ドライデンという当代きっ

ての文人とその取り巻きが集まる場所として名を売っていた。ドライデンが 1700 年に死ぬと、1710 年頃までは訪れる文人も多かったが、その後バトン・コーヒーハウスにその地位を譲る。18 世紀にはウィルの拠点は別のコーヒーハウスに移動する。

(5) 郵便とコーヒーハウス

イギリスでは郵便制度がいち早くできていた。17 世紀になると国内の郵便は官営に一本化され、一般国民に公開された。しかし、17 世紀末では、個別配達制度が確立されておらず、それに代わって、宿屋やコーヒーハウスに留め置きにして取りにいくという形がとられた。なかでも船舶郵便は、官営の郵便船の数が不足して需要に間に合わず、商船や軍艦で郵便を取り扱ったために、その郵便物の受け渡し場所としてコーヒーハウスが私設郵便局の役割を果たした（小林 162）。ロイズ保険はコーヒーハウスから生まれた。ロイズコーヒー店で船舶情報や外国情報の交換が行われ、ニュース・ペーパーが発行されるようになる。保険取引がコーヒー店で行われ、ロイズはコーヒー店の名前から、保険引受市場そのものへと転換し、やがてロイズ法を制定させ、ロイズ委員会を法人化してロイズ組合となったのである。

第 3 節 18 世紀のイギリスの出版界と読者

(1) 中産階級の読書

18 世紀のイギリスにおいては、作家がパトロンから独立し、それと表裏の関係にある読者層が急成長した。これは、著作物を購入する大衆市場が成立する過程でもあった。コリンズによると、イギリスでは 18 世紀中にロンドンを中心とした出版活動がイギリス全土に拡大したのであった。拡大は内容についても起こり、定期刊行誌、新聞、雑誌、書評誌、ロマンス、小説、子供向けの本など、出版物の形態や内容においても一挙に拡大したのであった（コリンズ, A. S. 243~）。

イギリスにおいては、コーヒーハウスの前期と新聞（17 世紀）、後期と雑誌（18 世紀）がそれぞれ関連をもっている（小林 134）。リチャード・

スティールが中心となって 1709 年刊行された『タトラー』の雑誌としての新しい存在価値を指摘している。タトラーとはおしゃべりの意味で、コーヒーハウスで集めたゴシップなどの題材をコーヒーハウスの名前を借りて記事の区分編集を行っている。『タトラー』第 1 号の文章を夏目漱石が翻訳している。

「艶事、娯楽、人寄せに関する記事はホワイト茶店と題する欄内に収め候。その他詩文はウィル軒、学芸はグレシエン軒、内外の通信はセント・ゼームズ軒とそれぞれ部門を分かち候…」。

ホワイト・チョコレート・ハウスは「ボー」と呼ばれる伊達男の溜り場で、ウィルは文人、グレシエンは学者、セント・ジェームズには政治家がよく訪れていた。1711 年の『スペクテイター』の発行によって、雑誌が一挙に隆盛を見た（小林 144）。毎日発行される雑誌で、政治議論は取り上げず、「観察者」になった。いきつけのコーヒーハウスに当初箱を設けて雑誌への投書をもらった。

コーヒーハウスは新聞雑誌だけでなく、図書も備えるようになり、図書室のような役割も果たすようになる。

『スペクテイター』の成功や小説の発達に伴って、本や雑誌を読む階級が上流階級に限られなくなる。しかし 17 世紀後半まで、本は一般労働者一日分の稼ぎでも買えない値段であった。本よりは薄く簡易なチャップブックというものが 18 世紀になってからよく出回っていた。粗末な紙に印刷された 20 頁くらいの挿絵入りの今日の新書版くらいの大きさの冊子で、滑稽な小説、宗教的な物語、犯罪物語、ロマンス、御伽噺、民間伝承、ロビンソン・クルーソーのような作品の改作版などの内容で、行商人が地方まで売り歩いていた。1〜5.6 ペンスであった。

コーヒーハウスは 18 世紀の半ばをピークとして徐々に衰える。一つの大きな要因はコーヒーの値上がりである。1 ペニーから 2 ペンスで飲めたものが、18 世紀の終わりごろには 6 ペンスから 1 シリングになっていた。それまで数千軒あったコー

ヒーハウスが一軒もなくなったと言われるほど激減した。ところが、1840 年には毎年 100 軒以上のコーヒーハウスが開店し、全体では 1,000〜1,300 軒と報告されている（清水 21）。このように激増復活した。

(2) 18 世紀のウィット

17 世紀末のウィルを拠点としたドライデンの文学は、宮廷やその近辺の限られた階層を読者としていた。ギリシャ・ローマの古典文学、フランス古典主義などへの造詣も深い高級なウィットたちであった。これに対して、18 世紀のバトンを拠点にしたアディソンらの文学のめざすところは、一般大衆（中間層以上）に文芸の知識、健全な判断力を与えることに、つまり啓蒙に主眼があった。デフォアの小説とアディソンのエッセーは、ドライデン、ボーブの旧主派に対して、新しい文学の潮流を示すものであった。デフォアの『ロビンソン・クルーソー』などの散文による虚構作品は、近代小説の発生の重要に要因となった。英雄ではなく、一般の人が主人公として登場し、同時代の社会風俗を描くなかで、それなりの首尾一貫性と、緊密な構成がなされている点に後に続く流れが見出される（小林 188）。アディソンの位置づけについて、英語辞典を作成したことで知られるジョンソンが述べている説を漱石は次のように訳している。「英国にあっては、脚本家を除くのほか、通俗生活に筆をつけたものがない。これあるは『タトラー』と『スペクテイター』から始まるというて宜しい。無愛想も過ぎれば野蛮になる。丁寧もむやみだと撫しつけに陥る。こういう欠点を矯正しようとした作家はまだ一人もいなかった。その他、いつ口を利いて宜しいか、またいつ差し控えべきものか、断るにはどうして断るものか、応ずるにはどうして応ずるものか、『タトラー』と『スペクテイター』が出るまでは誰も教えてくれ手がなかった。重大な倫理問題に関して義務の意義を説いたものはある。哲学・政治の大論争に断案を下したものはある。けれども、日常生活の道程を測量して……とげの類を取り除こうとした趣味の主宰者、礼法の判決者はこれより以前にまだ

出たことがなかったのである」(小林 190)。

アディソン、スティールらの扱っているテーマ・題材は日常生活に根ざしたものが多く、あえて限定すれば、18 世紀ロンドンの都会人の心性が見てとれる。『スペクテイター』に登場する何人かの虚構人物は「性格描写」が可能になったことを示している(小林 190)。

ウィルの文士たちは、詩と劇という崇高なジャンルについて論じることを好んだが、バトンの文士達は、一般市井の出来事が大きな位置を占め、一般の人々にわかるレベルで論じようとした。

もう一点変わったコーヒーハウスとして、ベッドフォードという店(1740~44)では、科学実験が行われた。ジョン・デザグリエルスという科学者が客の前で科学実験をして見せた。彼は、一般大衆に学術講演を行った最初の人物として知られている(小林 193)。

(3) ブッククラブ

18 世紀のイギリスには、1,000 を越えるブッククラブが全土に広がっていた(清水 70)⁽²⁾。ブッククラブとは、近隣の人が 30 人ほど集まって共同して本を購入し回し読みする組織である。ブッククラブの読者階層は中・上流階級であり、男性が中心であった。娯楽的な性格で、排他的で、秘密的な性格の組織であった。購入した本の内容例としては、一番冊数の多い分野は時局的政治問題を扱ったもの(定期刊行物とパンフレット類)、ついで旅行記、外国風物誌、宗教・説教集、などで、歴史や文学は稀で、哲学、数学、法律、医学、美術は皆無であった(清水 57)。会費は月 1 シリングで、貸本屋のお客よりも上の階層によって形成されていた(清水 70)。

なお、日本においてもブッククラブに類似した学習会が現れる。ただし、それは 100 年時代が下った 19 世紀半ば、明治 10 年代のことである。その動機も文明開化に刺激されてのものであった。政治意識の昂揚を目標に掲げて青年達が読書会や政治演説の練習を行うグループが全国各地に自主的に結成された(前田 154)。

(4) 貸本屋

イギリスにおける貸本屋は保養地に始まって、都市に組織化された貸本屋が現れたのは 18 世紀に入ってからであった。1740 年頃ロンドンに現れて普及し、18 世紀末には 26 軒あった。予約金を払って会員になり借りることができる。予約金は年に 15~20 シリング、1 ギニーなどで高く、大衆的ではなかった。中の上以上の階層の女性がお得意さんであった。当時女性の娯楽は読書くらいしかなく、軽い読み物つまり小説が好まれた。「良識」ある人たちは小説をくだらないものとして批判し読まなかった。19 世紀には、名古屋の大野屋のような大貸本屋がイギリスにも出現する。ミューディ貸本屋が有名である。チャールズ・エドワード・ミューディーが 1842 年に設立して 1937 年まで続いた。他の貸本屋を買収統合して業界に君臨した。会費は 1 ギニーと高かった。最盛期 5 万人の会員を持ち、19 世紀末には蔵書が 750 万冊に達した。ミューディは地方へも宅配を行い、植民地までも本を送り届けた。会社は地方部を持っていて、ブッククラブや文学サークル、地方の貸本屋に本を届けた。販売部では、一通り貸本としての役割を終えた本を大幅に値下げして販売した。

小説の値段が高かったことと、小説は買うほどのものではないという低い評価が貸本屋を繁盛させた。逆に小説は貸本屋のために三巻本という形式を半ば強制され、小説の形式を規定された(清水 81)。

第 4 節 19 世紀以降の労働者の読書

1808 年にコーヒーにかけられた税金が軽減されたことと、労働者に広がった禁酒運動が結びつきコーヒーハウスが復活し始めた。1840 年頃からコーヒーハウスが増加し、コーヒー一杯がまた 1 ペニー~3 ペンスで飲めるようになった。1 ペニーの店では 1 日 700 人から 800 人の客が来るが、そのほとんどは労働者であった。エワート報告では、ロンドンには 2,000 軒のコーヒーハウスがあり、利用者は主として節酒した労働者であった。食事を持ち込むことができ、新聞・雑誌を自由に

読むことができた。500軒のコーヒーハウスは付属の図書室を持ち、蔵書数2,000冊を越えるところもあった。ある大きなコーヒーハウスに置かれた出版物は、日刊紙43紙、地方紙・外国紙数紙、月刊誌24誌、クォーターリー4誌、週刊誌11誌で、一日に訪れる客は1,500人から1,800人であった(清水22)。

17世紀後半から18世紀にかけて、東インド会社によってアラビアのモカコーヒーが輸入されたが、18世紀に入るとオランダがジャワコーヒーをヨーロッパにもたらし、モカより安く売られるようになる。イギリスは貿易の力点を中国茶の輸入へ移し、イギリス国内では、茶に対して、コーヒーの価格が高くなった。また、18世紀になると、個人の家の構造が17世紀にくらべ良質化し、人を招いて談笑することが可能になった。コーヒーハウスやタヴァンで時間を潰す必要も無くなり。「アフターヌーン・ティー」が慣習化するようになる。また、新聞が一般化してコーヒーハウスに読みに行く必要もなくなった。このようにして、19世紀のコーヒーハウスは労働者の勉強部屋になった。労働者も情報・ニュースを渴望する層に入ってきたのである。

19世紀には慈善教育運動の力強さが増して、日曜学校が普及する。グラスゴーの新聞社主である、ロバート・レイクスはグラスゴー市に初めて日曜学校を開設し(1780年)、新聞と書籍業のコネを利用して、全国的な運動に高めた(フェザー279)。レイクスに続いて、宗教作家であるハンナ・モアは、宗教冊子協会を作って、新たに字を覚えた子供達のために読み物を提供した。この協会が出版した『廉価版宗教パンフレットの宝庫』は、中産階級の慈善家が購入して貧しい人々に贈るシステムを持っていた。宗教冊子協会の事業は大成功して、18世紀末にはそれぞれの冊子が何万部と印刷された。このシステムに目をつけた出版事業者は一分冊1ペニー小説(『黄表紙』)を出版するようになる。一度獲得された識字力の利用を統御することは不可能で、19世紀をとおして、出版社と慈善家は大衆的な読み物の提供で競い合った(フェザー281)。

《註》

- (1) レトリックの内容は発想、配置(章構成や内容の順番)、修辭(表現法)、記憶、発表がその柱である。現代の私たちが論文を書く枠組みがこれであり、パワーポイントが企画書の様式などとして、準備してしてくれる。
- (2) 清水氏はアメリカ人コーフマンの研究を紹介している。Paul, Kaufman, *Libraries and Their Users*, London, 1969.

参考文献

- 秋山隆平, 2007年, 『情報大爆発——コミュニケーション・デザインはどう変わるか』 宣伝会議
- アンダーソン・B, 白石さや・白石隆訳, 1991=1997年, 『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』 NTT出版
- 大内田鶴子, 藤田弘夫, 小山騰, 熊田俊郎, 鈴木輝隆, 皆吉淳平, 石井清輝, 2007年, 平成16年度~平成18年度科学研究費(基盤研究(B))研究成果報告書「英国・日本における古書店街の比較社会学的研究——まちづくり思想の相違について」
- 大内田鶴子, 2005年, 「現代学生の本離れ」 江戸川大学紀要『情報と社会』第15号, 147-156
- オング, WJ, 1982年, 桜井直文・林正寛・粕谷啓介訳, 1991年『声の文化と文字の文化』 藤原書店
- 香内三郎, 1982年, 『活字文化の誕生』 晶文社
- 倉田喜弘, 1980年『明治大正の民衆娯楽』 岩波新書114
- ガルトゥング・ヨハン=矢沢修二郎・大重光太郎訳, 2003=2004年, 『グローバル化と知的様式——社会科学方法論についての七つのエッセー』 東信堂
- 小林章夫, 1994年, 『ロンドンのコーヒー・ハウス——18世紀のイギリス生活史』 PHP文庫
- コリンズ, A. S, 青木健・榎本洋訳, 『十八世紀イギリス出版文化史——作家・パトロン・書籍商・読者』 1927年=1994年
- コリンズ・ポール, 2003年, 中尾真理訳 2005年, 『古書の聖地』, 晶文社
- 清水一嘉, 1999年, 『イギリス近代出版の諸相——コーヒーハウスから書評まで』 世界思想社
- フェーブル・リュシアン, ジャン・マルタン=アンリ, 関根素子・長谷川輝夫・宮下志朗・月村辰夫訳, 1971年=1985年, 『書物の出現』 筑摩書房
- Feather, John, 1988, *A History of British Publishing*, Chapman & Hall Ltd., J. フェザー, 箕輪成男訳, 1991年, 『イギリス出版史』 玉川大学出版部
- Booth, Richard. 1999, *My Kingdom of Books — An Autobiography*, Y Lolfa, リチャード・ブース, 1999年, 東真理子訳, 2002年, 『本の国の王様』 創元社
- 文庫の会編, 昭和48年(1973年), 『ヨーロッパ古書

紀行』文化出版局

前田愛，1973 年（有精堂出版），2001 年，『近代読者の成立』岩波現代文庫 文芸 32

宮下志朗，1989 年，『本の町リヨン』晶文社

山本義隆，2007 年，『十六世紀文化革命 1・2』みすず書房

吉田光邦，1987 年，『日本科学史』

脇村義太郎，1979 年，『東西書肆街考』岩波新書（黄版）87

渡辺淳，平成 7 年，『カフェ ― ユニークな文化の場所』丸善ライブラリー